

特選

小川 廣男
小池 正博
共選
西田 青沙
森川 敬三

半歌仙『風流の初』の巻 愛知県 伊賀連句会

宮川 尚子 捌

風流の初やおくの田植うた

芭蕉翁

雲の峰まで続く畦道

松岡 芳恵

縁側に碁盤いくつも並べゐて

北山いつ子

マグカップには紅茶たつぷり

全

ただいまと開くドアから月の影

安屋 宣子

井戸の釣瓶にこおろぎの鳴く

町野 正子

新米の香りの満ちる台所

森田 満枝

頬にキスする日々のルーティン

石川つや子

あれそれで会話つながる老夫婦

い

八犬伝を口述で書く

芳

西南の地には爆撃またけふも

宣

声よき僧のあげる念仏

正

凍月のしみわたる酒酌み交はし

つ

コンテナ船に雪の積もりて

満

幼子が画帳はみ出し描く夢

正

雛を飾ったことも懐かし

宣

胴吹きの花力込め咲き誇る

芳

山笑ひだす散策の朝

い

令和七年四月十二日 満尾 於 絵手紙いろは

入選1

半歌仙『足這ひのぼる』の巻

神奈川県 夢々連句会

衆議判 捌

さざれ蟹足這ひのぼる清水哉

芭蕉翁

馬冷やされて帰る杣道

柳田 宏子

産直のサイト作りを学ぶらん

永塚 尚代

ボランティア笑む子供食堂

後藤とみ子

望月に最終便は機首を向け

宏子

王宮前の広場やや寒

尚代

鴟の贅魔女伝承の秘薬売る

とみ子

一途な思慕に年の差を超え

宏子

後朝にドアにマスコミ待ち受けて

尚代

奈良へと通ひ巡るみほとけ

とみ子

国造り渡来文化を倣ひ入れ

宏子

地口賑やか町方の粋

尚代

大きくさめ伊達の薄着の月の路地

とみ子

パパサンタにはホットワインを

宏子

夢叶へ戴帽式の壇上に

尚代

かねて用意の鯛の昆布締め

とみ子

鄙びたる単線駅に花万朶

尚代

春嶺晴れて良き日はじまる

宏子

令和七年七月九日 満尾 於 文音

入選2

半歌仙『川せみ』の巻

奈良県 仔鹿の会

中井登志子 捌

川せみや三尺わきに己がかげ

芭蕉翁

シッター切れば麦の秋風

中井登志子

定例の篠笛の会楽しみて

橋本比佐子

布片合はせ手提げ試作し

磯野 裕美

月まどか今日の出来事絵日記に

小林 順子

檸檬の実り籠にいつぱい

裕美

角伐を幾重にも巻くエトランゼ

登志子

この道行くと直哉旧宅

順子

プロポーズLINEで送り即振られ

比佐子

熱き思ひはちよいと封印

登志子

願かけの前垂れつけたおしらさま

平田美恵子

なにも届かぬガザのこどもに

芹澤ちよ乃

霜解の広場にすくと時計塔

裕美

果てぬ夜咄月もかたぶく

美恵子

あの世まで旅のお伴は歎異抄

登志子

半眼の猫屋根に寝そべり

順子

ゆつたりと城の堀ゆく花筏

ちよ乃

山々笑ひ開ける弁当

比佐子

令和七年六月二十五日 満尾 於 ハートピア京都（ウ四より文音）

入選3

半歌仙『若葉して』の巻

奈良県

松本奈里子 捌

若葉して御めの雫ぬぐはばや

芭蕉翁

潮の香を聞く今朝の小満

松本奈里子

陶房の白土さくと練り上げて

谷澤 節

一輪車押す轍くつきり

もりともこ

満月に手を合はす子のあどけなく

里

帰りに持たす実柘榴の籠

節

村芝居井伊直弼の仇討ちを

と

神頼みなど時代錯誤か

里

美しき髪見せるも罪と咎められ

節

鏡に向かひぬぐふ唇

と

ほろ苦きホットワインをひと息に

里

凍つる鐘の音ビッグベンより

節

戦場の孤独に耐へる寒の月

と

食料自給率の逼迫

里

算数の四則演算まごついて

節

キャッチボールでほぐす肩凝

と

風流に花を散らすはぐれ猿

節

陽炎のなか揺らぐせせらぎ

と

令和七年六月十一日 満尾 於 文音

入選4

半歌仙『白露も』の巻

奈良県 奈良県連句協会

松本奈里子 捌

白露もこぼさぬ萩のうねり哉

芭蕉翁

百光年をわたる玉輪

松本奈里子

島影に朱鷺の姿のほの見えて

岡谷 樹

新聞ひろげ斜め読みする

上野 知子

純喫茶昭和の香りぶんぶんと

山本 天球

しめりを帯びる梅雨のバス停

奈里子

万博にユスリカの湧き焚く蚊遣り

知子

ふたりでリノベ藁葺きの家

樹

祝盃の音頭は髭の支社長に

奈里子

芳醇の味老いらくの恋

天球

こころには貪瞋痴てふ三毒が

井内 温雄

引きずり込むは朽野の闇

知子

寒月に見守られたる塾帰り

樹

反戦の歌ボブ・ディラン吹ゆ

温雄

崩された古墳の跡の埴輪片

天球

時空旅行の企画提案

知子

よろづ世の色を綾なす花ふぶき

温雄

清き流れに跳ねる若鮎

天球

令和七年六月十七日 満尾 於 文音

入選5

半歌仙『蛍見や』の巻

奈良県 奈良県連句協会

衆議判 捌

蛍見や船頭酔うておぼつかな

芭蕉翁

梅雨雷にひるがへる櫂

谷澤 節

かくれんぼ息をひそめる路地裏に

松本奈里子

映画はまさにクライマックス

三原 寿典

有明けを背負ひて進む始発バス

増田 敏

靴にからまり香る草の穂

森本 章子

秋祭り笛の音高く響きをり

岡谷 樹

ひとり芝居のおどろおどろし

角谷美恵子

のつぺらぼう口はなくてもキスOK

もりともこ

座右の銘となつたのちのち

竹山みどり

南極でみつけた石は万博へ

林 典子

夢の続きを追ふ観覧車

山崎夫美子

古日記病ひの窓の月に問ふ

章子

狐の親子銀貨一枚

樹

本物と区別がつかぬ偽サイト

敏

寺苑の隅に水飴の店

寿典

面影を集めては散る花筏

夫美子

茂吉の歌碑に風はやはらか

寿典

令和七年六月十四日 満尾 於 奈良市はぐくみセンター

入選6

半歌仙『暑き日』の巻

愛媛県 石手寺連句会

山本あと 捌

暑き日を海に入れたり最上川

芭蕉翁

漁師の庭の白き紫陽花

山本あと

散髪をすませ帽子を手に持ちて

岡田伊勢子

はじける声で児らの挨拶

松井 洋子

へぼ将棋指しつ指されつ月を待ち

伊

風にそよりと揺るる黍の穂

洋

亡き父の好きな柚餅子を家苞に

洋

山を渡りてローカル電車

久

翠

仲人に案内さるる見合席

伊

目黒蓮似に母はぞつこん

伊

忘れ物箱に残りしUSB

翠

雪晴の月祈る停戦

あ

爛酒の徳利並べ話し込み

洋

長尾鶏立つ神木の枝

あ

いちにさん野球部員の駆け行きて

翠

旅の荷おろすベンチうららか

伊

龍のごと花びら舞へる風の中

あ

たれか手を振るかぎろひの路

翠

令和七年七月三日 満尾 於 ZOOM

入選7

半歌仙『唐破風の』の巻

鹿児島県 猫蓑会

五郎丸照子 捌

唐破風の入日や薄き夕涼み

芭蕉翁

土のほのかに匂う打水

五郎丸照子

新らしきゲームに子らが集まりて

近藤 純子

じゃまする猫を膝に抱きあげ

照子

明月を見あぐる先に機影過ぎ

純子

梢騒がす色変えぬ松

照子

かまわぬの柄に包まれ栗羊羹

純子

鍵をかけたかいつも気がかり

照子

横顔はギリシヤ女神に瓜ふたつ

純子

酒がはいればのろけ話で

照子

墨痕の残る家系図六代目

照子

棋王争う床に寒梅

純子

寄せる波砂丘海岸月冴えて

照子

旅の道連れキティムーミン

純子

山門に修行の僧の糞掃衣

照子

受験を終えて野球少年

純子

夢いくつ花の都で咲かせんと

照子

揚がる雲雀の点になりゆく

純子

令和七年七月十五日 満尾 於 日本連句協会リモート室

入選8

半歌仙『いざともに』の巻

滋賀県

谷澤 節 捌

いざともに穂麦喰はん草枕

芭蕉翁

幟かかげる里の入り口

谷澤 節

水時計たゆたふ波紋あきなくて

もりともこ

背中を抜ける風に見覚え

松本奈里子

望月夜かげふみ遊びきりもなし

節

ばつたんばたん唐臼の音

と

鬼やんま周回軌道たもちつつ

奈

着陸しますカイラス山に

節

気まぐれに五体投地をしてみれば

と

切なく疼くおとしの傷

奈

防人の妻は夢にて睦み合ひ

節

素肌自慢は白湯のおかげと

と

森統べる縄文杉に月は凍て

奈

枝から枝へ渡る寒猿

節

腰掛けのカバーの柄はモネもどき

と

大吟醸の封はそのまま

奈

花盛りかげに隠れる避雷針

と

汽車に手をふる遠足の子等

節

令和七年七月十八日 満尾 於 文音

入選9

半歌仙『小鯛さす』の巻

富山県 風狂連句会

大村 歌子 捌

小鯛さす柳涼しや海士がつま

芭蕉翁

風にまかせる空梅雨の浜

いぬじま正一

食べ歩く秘湯巡りを趣味として

南部一二三

店主は八十路駅のコンビニ

北野眞知子

石庭の月の奥より猫の声

大村 歌子

漫面積み上げ灯火親しむ

村戸 弥生

新発意の胸にぼつんと赤い羽根

密田 妖子

町内会の会計もして

弥生

年頃の写真ばら撒くお節介

眞知子

耳を欹て素つ気ないふり

正一

ミサイルを民間人へ容赦なく

妖子

見て御座るぞと母の追伸

一二三

凍月に氏子が囲む薦被

眞知子

楽毅の臨書寒の水磨る

歌子

応援の旗は手造り草野球

正一

二日灸に幼抱きて

妖子

峯々へ花の便りの駆けあがり

弥生

淡き初虹かかる半島

一二三

令和七年七月七日 満尾 於 星井町公民館

入選10

半歌仙『寝むたし』の巻

東京都 すぎなみ連句会

静 寿美子 捌

能なしの寝むたし我をぎやうぎやうし

芭蕉翁

肌にさらりと麻の甚平

加那屋こあ

あいまいな鄙の言葉も聞き慣れて

山崎 垂

客一人でも寄席は幕開け

玉木たまね

名月に残業疲れ癒さるる

佐々木佳子

柿羊羹に渋茶おかはり

静 寿美子

秋深し歴史小説山積みに

あ

名を尋ぬれば母と同音

垂

バーボンを呷り強気で告白す

ね

アンクレットに触るる唇

佳

行く末を占定めして転居せり

寿

腰痛堪へ万博の列

あ

ウクライナ兵士眺むる冬の月

垂

雪女から貰ふアドレス

ね

推しの寺それぞれ語る旅の宿

佳

橋のたもとで猫を拾って

寿

花盛り子らの駆けっこ岬まで

あ

道をふさいで育つ蒲公英

垂

令和七年六月十九日 満尾 於 高円寺北集会所

入選11

半歌仙『ほととぎす』の巻

宮城県 襲

浜田 則子 捌

曙はまだ紫にほととぎす

芭蕉翁

武者人形を飾る床の間

川村 紀子

冒険家世界の峰を制覇して

浜田 則子

趣味となりたるコイン収集

紀子

月に逢ふチャリティーショーの帰り道

則子

小粒ながらも良き秋の繭

紀子

僧院の深閑として蔦紅葉

則子

ロマンス詐欺に騙し騙され

紀子

気がつけば空気のやうな二人です

則子

宅急便に故郷の品

紀子

古文書が解けて秘蔵の酒開ける

則子

兵器買ふ国兵士売る国

紀子

雪化粧纏ふ集落月皓々

紀子

誰か噂を大きくつさめ

則子

高齢化医師も患者も看護師も

紀子

入学祝送る pay pay

則子

桜舞ふ光まぶしき花見船

紀子

ジブリの森を跳ねる馬の子

執筆

令和七年七月十日 満尾 於 市民活動サポートセンター

入選12

半歌仙『五月雨の』の巻

茨城県 水無月会

大山とし子 捌

五月雨の降り残してや光堂

芭蕉翁

清らかな声の夏のうぐいす

大山とし子

あこがれのメッシュを入れた髪型に

後藤 算子

発表会に急ぐ先生

黒沢かすみ

島人は舟を浮かべて月を待つ

根本美茄子

とうもろこしの甘さほどほど

算

利酒の老舗訪ねる旅に出て

と

心に沁みる牧水の歌

美

図書館のいつもの席に座る彼

か

職場の恋はスリル満点

と

物陰で猫はひたすら爪を研ぎ

算

足腰元気後期高齢

か

茶柱の立って始める年用意

美

月中天に雪の故郷

算

子供等はアンパンマンが大好きで

と

断捨離しても捨てられぬ夢

美

ようやくに楚々と咲きたる花若木

か

ふわりと続く笑う山脈

算

令和七年七月二十日 満尾 於 文音

入選13

半歌仙『あこくその』の巻

愛媛県 草笛連句会

名本 敦子 捌

あこくその心も知らず梅の花

芭蕉翁

鶯餅の変はらざる味

名本 敦子

久々の朧月夜をドライブに

平井 繁樹

塀の上よりじつと見る猫

川又 和志

新聞紙延べて老爺は爪を切り

升田佐栄子

プールサイドにお臍ずらりと

和志

暑気中りとて駆けつける救急車

中田くに子

タトウの文字は般若心経

村上 不映

コンビニへ峠の魔界越えてゆき

上田 是文

友の夫をちよつと拝借

山岡 良春

赤とんぼ恋路のすきま縫つて飛び

和志

酸いも甘いも流す濁酒

敦子

月の舟戦火の町をいとほしみ

くに子

ムンクの叫び何を示すや

佐栄子

風待ちの小島の宿は混み合ひて

不映

仕立て下ろしの服に染み跡

繁樹

濃く淡く宙を舞ひたる飛花落下

良春

遠のいてゆく遠足の子ら

是文

令和七年七月十日 満尾 於 生活文化センター・文音

入選14

半歌仙『椎の花』の巻

愛媛県 杖の淵連句会

久 翠 捌

旅人のこゝろにも似よ椎の花

芭蕉翁

虹を眼下に望む村里

久 翠

銀製の懷中時計磨きゐて

藪 真智子

ソファーにいつも犬の寝そべり

杉山 豚望

あばら家はDIYでしやれた家

真智子

月を背にして啜る鍋焼き

豚望

臘八会婆ぶつぶつと念珠繰り

翠

若水匂ふ青竹の杓

翠

告白のハートスタンプ矢継早

豚望

笑みもキュートなAIの美女

真智子

新涼のハシビロコウは夢を見て

豚望

有明海に不知火の揺れ

真智子

山の端に雲を払へる望の月

真智子

絵空事云ふ選挙公約

豚望

熱の子に葛根湯のよく効いて

豚望

厨の窓を過る粉蝶

真智子

花篝酒盃を呷る太郎冠者

翠

風船売りのしばし一服

真智子

令和七年七月七日 満尾 於 杖の淵庵

入選15

半歌仙『四月の桜狩り』の巻 徳島県 花音連句会

西條 裕子 捌

思ひ立つ木曾や四月の桜狩り

芭蕉翁

草笛を吹き越える峠路

西條 裕子

ででむしもてんとうむしも嬉々として

東條 士郎

雨しとしとと築垣に降り

佐藤 清幸

再びの良夜を共に待ち望み

裕子

後の拾は仕上がりてくる

士郎

粹狂を口実にして菊の酒

清幸

言ひ寄られても如才ない所作

裕子

三つ巴卍巴のなれの果て

士郎

我利我利亡者見捨て留学

清幸

伸しあがるカリスマ的なポピュリスト

裕子

掘ったばかりの大根を切る

士郎

のつそりと社の杜に寒の月

清幸

百歳の母すこやかに逝き

裕子

モノクロの夢かけめぐる古里に

士郎

野焼の煙る往時懐かし

清幸

楽屋まで届けられしは花筐

士郎

未来へ種を蒔く季は今

執筆

令和七年七月二十日 満尾 於 徳島県立文学書道館く文音